

ち はら ざき
富山市千原崎遺跡
発掘調査報告書

—一般国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)—

2001

富山市教育委員会

ち はら ざき
富山市千原崎遺跡

発掘調査報告書

—一般国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)—

2001

富山市教育委員会

例　　言

1. 本書は、富山市千原崎遺跡内に所在する千原崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、富山県土木部が事業主体となる一般国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴うもので、富山県富山土木事務所の委託を受けて、富山市教育委員会が実施した。
3. 調査期間・面積
現地調査 平成12年9月11日～平成12年12月9日 720m²
出土品整理 平成12年12月22日～平成13年3月28日
4. 調査担当者 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター 学芸員 鹿島昌也
5. 調査事務局は、富山市教育委員会 埋蔵文化財センター（所長 藤田富士夫）に置き、文化庁、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。
6. 現地発掘調査及び出土品整理に際し、宮田進一、橋本正春、斎藤隆（富山県埋蔵文化財センター）、広岡公夫（富山大学理学部）各氏に指導助言をいただいた。記して謝意を表します。
7. 遺構記号は、溝跡：SD、土坑：SK、井戸：SE、柱穴：P、不明遺構：SXを基本とする。遺構記号は、遺構検出時に付記したものを使用している。そのため遺構完掘後遺構の性格が変わっても検出時の記号番号を用い、Ⅲ調査の概要の2. 遺構で区分した。
8. 出土品及び原図・写真類は、富山市教育委員会が保管している。
9. 写真図版のスケールは、銅錢（実大）以外は約1/3である。
10. 本書の執筆は、I 遺跡の位置と環境を主任学芸員 古川知明が、その他は鹿島が行った。

目　　次

I 遺跡の位置と環境	1
II 調査の経緯	4
III 調査の概要	8
IVまとめ	24
図版	27
報告書抄録	

I 遺跡の位置と環境

千原崎遺跡は、富山市街地の北方約5kmの海岸部、神通川右岸河口付近の富山市千原崎地内に所在する近世初期を主とする集落遺跡である。遺跡は神通川河口から約2km遡った地点にあり、神通川とこれに沿って東側約200mを平行に走る富岩運河とによって挟まれた区域に所在する。

遺跡は標高2~3mの神通川自然堤防上に立地する。遺跡の西辺には江戸時代初期と推定される護岸施設が試掘調査で検出されており、近世初期にはほぼ現在の流路が形成されていたものと推定される。集落の形成された地盤は締まりのない中粒砂で、下層ほど粒度が大きくなる。

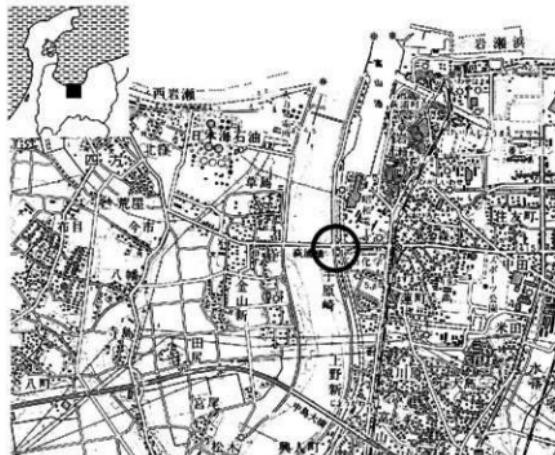
神通川は、呉羽山丘陵以北において、かつてかなりの蛇行や河道の変更があり、河岸段丘崖線の名残や低湿地の存在からその痕跡を知ることができる。千原崎や対岸中州の草島の村はいずれも自然堤防上に立地し、洪水等の被害を受けにくい安定した土地であったことも遺跡の形成の一因となっていると考えられる。

『越中記』によれば、神通川の河口はもと西岩瀬側（現在の富山市四方）にあったが、江戸時代万治元年（1658）の大洪水で東岩瀬に流れができ、その後寛文8~9（1668~69）年の洪水以後本流は東岩瀬側となった。これがほぼ現在の流路である。寛文4年越中国四郡絵図には二股の神通川が描かれている。万治元年以前は、西岩瀬に河口をもつ西側流路が主流であったと推測され、その流路は古川と呼ばれる小河川として名残をとどめる。その時点においても東側流路には河道が残っており、遺跡の形成が始まった頃には、舟運の可能な程度の河川がすでに存在していたと考えられる。遺跡はその河川の東側に構築されたものである。

千原崎遺跡の立地について、地形図等による古地形の復原という手法で明らかにしたのが第3図である。

遺跡の周囲には縄文時代から近世初期の遺跡が広範囲に所在する。縄文時代には神通川左岸海岸部の四方荒屋遺跡で縄文後期～晩期の土器、千原崎遺跡で中期から晩期の土器が出土しているが少量であり、遺構を伴わなかつたり二次堆積であったりしておらず、集落の形成は積極的には認められない。

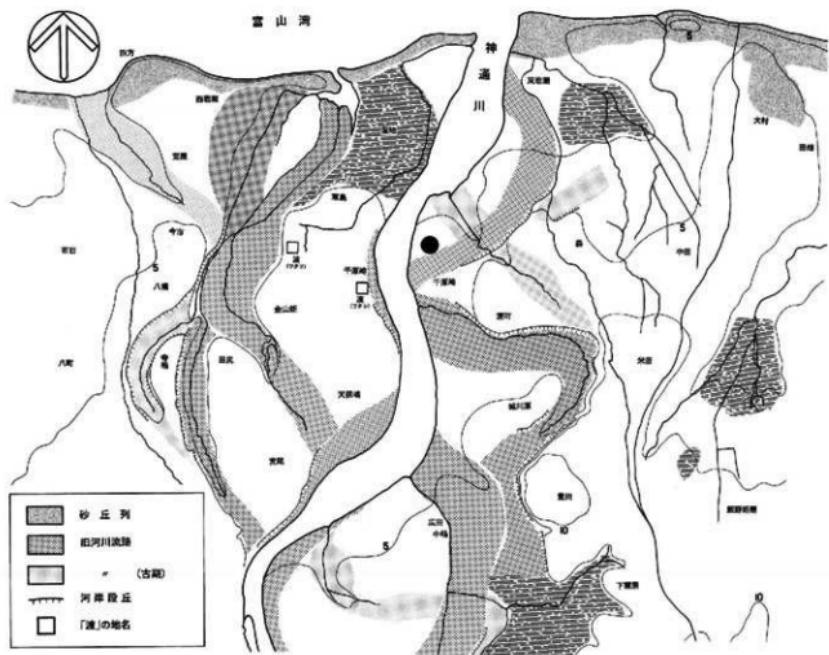
弥生時代中期から



第1図 千原崎遺跡位置図（1:50,000）



第2図 1910(明治43)年陸地測量部測量迅速図(1:25,000) 網点が遺跡範囲



第3図 千原崎遺跡(●印)周辺の古地形と地名(明治43年陸地測量部測量迅速図を利用)

古墳時代前期にかけては、左岸海岸部で大規模な集落が形成される。江代割遺跡、四方荒屋遺跡で堅穴住居が検出されている。いずれも弥生時代後期に洪水による冠水があり集落は埋没しているが、古墳時代前期に再び集落が形成され、それ以後は比較的安定した集落形成がなされたようである。

奈良・平安時代には、対岸の岩瀬・米田・豊田の河岸段丘上に官的施設と推定される遺跡群が出現する。米田大覚遺跡では掘立柱建物群・堅穴住居群が検出され、井戸祭祀や則天文字を記した墨書き土器の出土がある。^[富山市考古資料館1997] 豊田人塚遺跡では、平安時代の溝に、「神服小年賀」と書かれた人形や人面墨書き土器の出土があり、祓など律令祭祀の場と考えられている。^[富山市教委1998a]

古代において、神通川は新川郡の西境であったと考えられている。『和名類聚抄』には新川郡石勢郷とあり、神通川河口の岩瀬地区に比定されている。また『延喜式』には北陸道の驛家として磐瀬駅が置かれていたとみえる。駅の位置については、東岩瀬か西岩瀬か議論の分かれるところであるが、河川の変遷等から考えて当時の流路右岸河口であった西岩瀬側であった可能性が高いと考えられる。『越中志微』では駅の位置を西磐瀬としている。

中世において、千原崎遺跡では珠州焼等中世遺物の出土がある。神通川左岸の四方荒屋遺跡では掘立柱建物跡が検出され、また四方北窪遺跡においては掘立柱建物、溝群などの集落跡が検出されている。特に四方北窪遺跡は、西岩瀬集落域の東端にあり、刻書のある中国製天目模倣瓦質椀という稀少な遺物の出土等から、中世西岩瀬港町の一角にあたるものと推定されている。^[富山市教委1998b]

日本最古の海商法『廻船式目』貞応2年(1223)でかかげられる三津七湊の一つに越中岩瀬湊がある。この湊は西岩瀬港をさすもので、その繁栄は享保年間頃まで加賀藩の米積出港として利用されるなどして続き、江戸十三港のうち第8番に「越中州八重津西岩瀬港」とあげられるまでになった。しかし前述の大洪水以後は東岩瀬港に機能が移転し、その後は漁港等として利用されるにとどまっている。

江戸期の千原崎には、北陸街道（加賀藩主往還道）が通過するための渡し場が設けられた。中世以降、下流には藩宮の「岩瀬の渡し」があり、慶長14年（1609）の廢止以後草島に移動した。寛文8年（1668）の洪水以降、草島の渡しは衰微し、千原崎と金山新を結ぶ「千原崎の渡し」が新たに設けられている。

この渡しについて、明治期の地図では河道西岸側に「渡」（ワタシ）という字名を記載しており、遺跡の所在する東岸側ではない。地形図等ではこの渡と金山新の間に河道があったことは読み取れず、今後の詳細な検討が必要である。

これらのことからわかるように、神通川河口周辺は古代より陸海上交通の要衝の地として位置付けられていたといえる。千原崎遺跡はこのようなエリアの中に位置し、平成6年の調査で確認された集落の性格を考えるとすれば、河川に面する港町宿場的性格が想定できよう。

（古川）

II 調査の経緯

千原崎遺跡は、大正10年（1921）3月神通川改修工事の際、人骨とともに弥生式土器が出土し、富山県史蹟名勝天然記念物調査委員大村正之によって調査報告され、知られるようになった（大村1921）。その後昭和初年に行われた富岩運河掘削の際にも大量の土器や樹木が出土した。それらは東京国立博物館に保管されており、弥生時代末から古墳時代初期の完形の台付壺は代表的なものである。

富山市が昭和50年に発行した『富山市埋蔵文化財包蔵地図』ではおよその出土地点を押さえるにとどまったが、昭和63～平成3年に行った分布調査では、神通川河川敷を中心とした部分で、古代から近世の遺物散布範囲が広がっていることを確認したため、遺跡範囲を大幅に広げ、総計161,000m²とした（富山市教委『富山市遺跡地図』1993）。

平成2年、萩浦橋新設計画について富山県富山土木事務所から協議があり、これに伴う東詰河川敷地内の試掘調査では、河川敷のほぼ中央に古墳時代前期とみられる遺物包含層及び遺構（穴）と江戸時代初期とみられる護岸石列を確認した。

平成5年、萩浦橋東詰のロータリー化計画が提示され、これに伴う試掘調査で5,250m²の遺跡が確認され、保護措置が必要となった。協議の結果、緑地帯予定地2,000m²を除いた3,250m²の発掘調査が必要とされた。調査を担当する市教育委員会においては十分な調査体制がとれないため、緊急度の高いところは民間委託を活用し、工期との調整を図りながら調査を進めた。



第4図 発掘調査区（1:3,000）



第5図 千原崎遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

- 1 千原崎（集落跡/縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世）
- 2 草島（散布地/中世）
- 3 四方北塚（集落跡、城跡/弥生、奈良、平安、室町、近世）
- 4 四方荒屋（集落跡/縄文、弥生、古墳、平安、中世）
- 5 四方背戸割（集落跡/弥生、古墳、奈良、平安、中世）
- 6 今市（集落跡/縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世）
- 7 岩瀬天神（集落跡/縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世）
- 8 岩瀬天神II（散布地/弥生）
- 9 森（散布地/縄文、奈良、平安）
- 10 道町（散布地/縄文、奈良、平安）
- 11 米田大覚（集落跡、官衙/奈良、平安、中世、近世）
- 12 烏（散布地/奈良、平安）
- 13 ちょうちょう塚北（散布地/弥生）
- 14 豊田大塚（集落跡、弥生、古墳、平安、中世）
- 15 豊田中吉原（散布地）
- 16 豊丘町・豊田城跡（散布地、城跡、闘文、奈良、平安、中世）
- 17 景田（集落跡/縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世）
- 18 下富居（散布地/縄文、奈良、平安、中世）
- 19 尾（散布地/奈良、平安）

平成6年度は、ボックス工事に伴う調査（第1次調査区、民間委託）及び南北両ロータリーの道路敷の調査（第2次調査区）、合わせて2,124m²の発掘調査を行った。

調査で確認された遺構は、土間建物2棟、掘立柱建物（棟数2棟以上）、堅穴状建物3棟、井戸8基、土坑188基、溝14本があり、16世紀末から17世紀前半（江戸時代初期）を中心とした集落と、17世紀後半から18世紀初め頃（江戸時代前期）までの2時期あることが判明した（富山市教委1995）。

平成10年に、萩浦橋東詰め北側ロークター一部拡張のため50m²の発掘調査を行った。

調査では、土坑1基、溝1条の遺構が確認され、土坑の年代が、17世紀前半と見られている（第3次調査区）（富山市教委1999）。

平成12年度に、萩浦橋東詰め南側ロークター拡張のため、当初920m²の調査計画が立てられたが、一部設計変更が行われ、730m²を対象に発掘調査を実施した。

現地発掘調査は、平成12年9月11日から同年12月9日まで行った。（第4次調査区）

III 調査の概要

1. 概要

調査で確認出来た遺構の種類として土坑、溝、方形堅穴状遺構、井戸、柱穴などがある。基本層序は、上部に民家跡地の為盛土がなされ一部黄色地山層まで搅乱が及ぶ。調査区東部に暗褐灰色を基調とする遺物包含層が確認できた。（第6図右上土層図参照）

2. 遺構

1) 土坑

S K01（第6図） 調査区北西に位置し一部調査区北側へ続く。直径約3.2mの不整円形を呈し、深さ約0.25mを測る。覆土は暗褐色を基調とする。土師質皿、越中瀬戸焼丸碗、土鍤が出土している。

S K02（第6図） 調査区北西角に位置し北西側へ続く。深さ約0.25mを測る。覆土は灰褐色の砂質土を基調とする。10cm大の石を検出している。

S K03（第6図） 調査区北西に位置しSK02を切る。長軸1.6m、短軸1mの隅丸方形を呈し、深さ約0.35mを測る。断面形は半円形を呈し、覆土は暗褐色砂を基調とする。越中瀬戸焼、八尾焼、熱を受けた須恵器有台杯が出土している。

S K05（第6図） 調査区北西部に位置し、一部調査区西側へ続く。直径約1.3mの円形を呈し、深さ約0.35mを測る。断面形はU字形を呈し、覆土は暗褐灰砂質色を基調とする。土師質皿が出土している。

S K06（第6図） 調査区西部に位置し、現代コンクリート製井戸に切られる。直径約1.2mの不整円形を呈し、深さ0.7mを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗灰色を基調とする。土師質皿が出土している。

S K08（第6図） 調査区西部に位置する。長軸0.86m、短軸0.72mの楕円形を呈し、深さ0.6mを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土は暗褐色を基調とする。

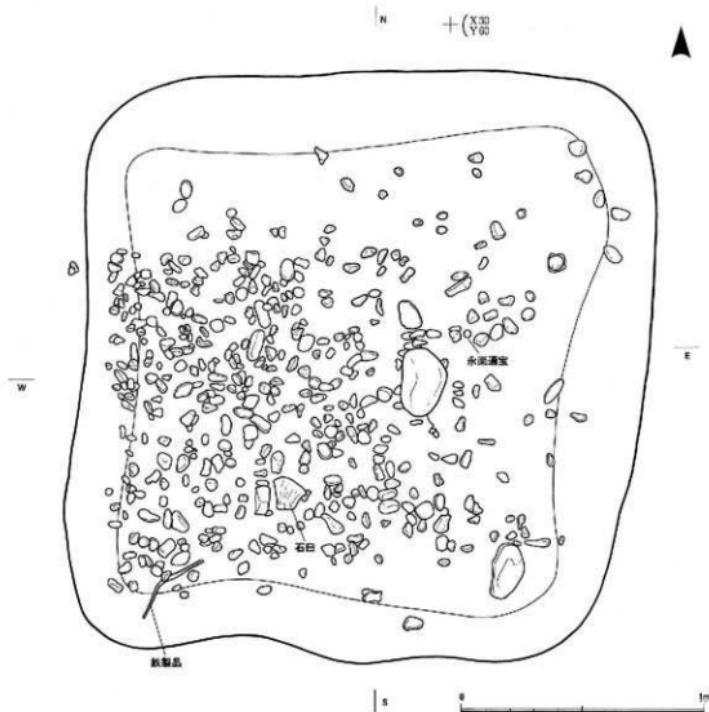
S K09（第6図） 調査区西部に位置する。直径約1.3mの円形を呈し、深さ0.45mを測る。断面形はU字形を呈し、覆土は暗黄褐色砂質土を基調とする。

S K11（第6図） 調査区西部に位置する。長軸1.5m、短軸0.7mの不整形を呈し、

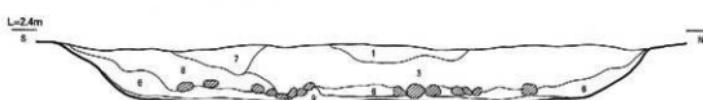


第6図 千原崎遺跡（第4地区）遺構図（1/100）及び調査区北壁（東部）土層断面図（S = 1/40）

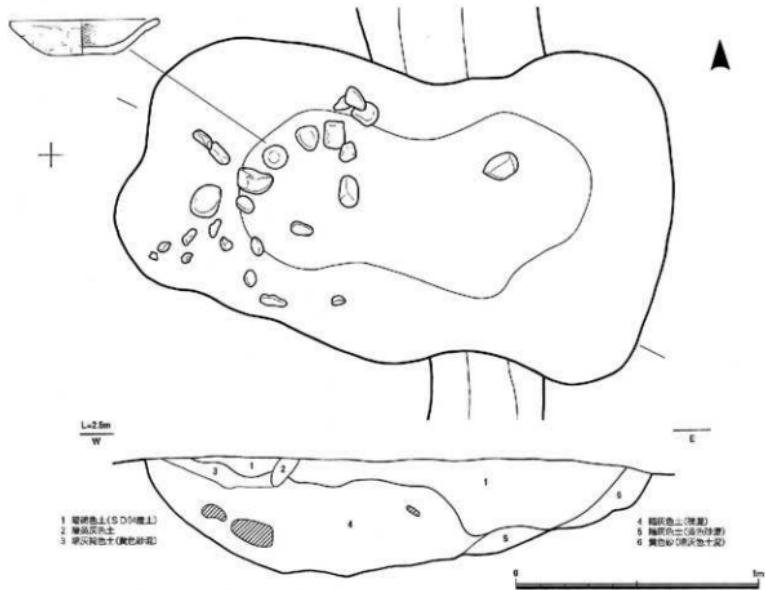
1:100



- | | |
|--------------|----------------|
| 1 砂質土(黃色土) | 6 黃褐色土(白色沙) |
| 2 黑色土 | 7 雜質褐色土(雜質黃色土) |
| 3 黑褐色土 | 8 黃褐色土 |
| 4 細長褐色土 | 9 黃白色沙 |
| 5 雜質褐色土(黃色土) | |



第7図 土坑 (S K12) S = 1 / 20



第8図 土坑（SK19）溝（SD04）S = 1/20

深さ約0.1mを測る。覆土は暗褐色を基調とする。

S K12（第6、7図） 調査区西よりに位置する。一边約2.3mの隅丸正方形を呈し、深さ約0.25mを測る。覆土は暗褐色を基調とし、中～下部に礫を密に敷き詰めていた。被熱を受けた礫も含まれ、石臼片、鉄片、土師質皿、銅錢「永樂通寶」が出土した。

S K13（第6図） S K12の南に位置する。直径約1.3mの円形を呈し、深さ約0.3mを測る。断面形は開くV字形を呈し、覆土は暗褐色を基調とする。

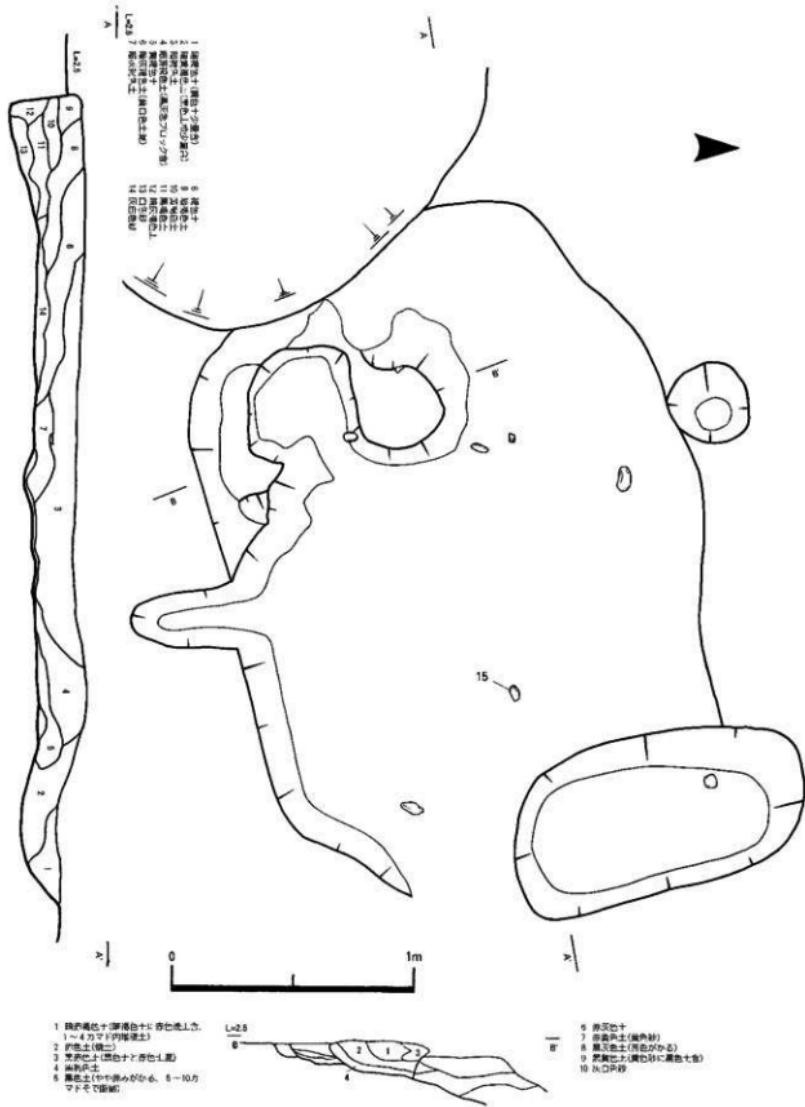
S K15（第6図） 調査区南西部に位置する。長軸1.8m、短軸1mの不整楕円形を呈し、深さ約0.3mを測る。覆土は黄褐色土を基調とする。

S K19（第6、8図） 調査区南西部に位置し、SD04に切られる。長軸2.1m、短軸1.4mの隅丸長方形を呈し、深さ約0.54mを測る。断面形は鍋底状を呈し、覆土は暗灰色を呈し、拳大の石が入り、被熱石も含まれる。土師質皿、八尾焼櫻鉢が出土した。

S K21（第6図） 調査区北東部に位置し、調査区北側へ続く。3.5m以上×4m以上の方形を呈し、深さ0.64mを測る。覆土はほぼ中層に黄白色の砂層が入り、その上部は暗灰色、下部は暗灰褐色を呈する。上部東寄りにSD07が南北方向に切っている。遺構上面から越中瀬戸焼が数点出土した。

S K22（第6図） 調査区中央やや北により位置し、西側の一部を現代家屋施設によつて搅乱を受けている。南側に位置するSK24に一部切られている。長軸2.4m以上、短軸約1.8mの楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。覆土は暗灰褐色を基調とし、銅錢「元豐通寶」「治平元寶」他1点、近世陶磁器片が出土している。

S K24（第6図） 調査区中央部に位置し、土坑、柱穴に切られる。長軸3m、短軸2.7mの隅丸方形を呈し、深さ約0.5mを測る。西側に円形を呈する土坑が重複し、直径



第9図 S K25遺構図及び土層断面図 ($S = 1/20$)

約1.6mを測り、最深部は0.7mを測る。SK24の覆土は黄灰色を基調とし下部に礫が入る。重複する円形土坑は暗灰色を基調とする。

SK25（第6、9図） 調査区中央北寄りに位置し、西側に搅乱を受けている。長軸約2.5m、短軸2mの長方形を呈し、深さ0.28mを測る。南西角にかまどが所在する。覆土は黄褐色を基調とし、かまど周辺部から土師質土器片数点を検出している。床面は地山の黄白色砂であるが、かまど周辺の床面に一部褐色硬化面が所在する。かまど袖部は黒色化しており、燃焼部覆土に赤色化が見られる。煙道部は現代家屋施設により搅乱を受け構造は不明である。

SK27（第6図） 調査区北東部に位置し、SD07に切られる。直径2.1mの円形を呈し、深さ0.6mを測る。底面にやや凹凸が見られる。覆土は黒灰色を基調とし、土師質土器片、伊万里焼片が出土した。

SK28（第6図） 調査区北寄りに位置し、一部北側へ続く。一辺3.5m以上×1.6mの方形を呈し深さ0.5mを測る。下部に角度を帯びる1.6m×1.1m、深さ0.34mの長方形の掘り込みを確認した。覆土は、上部が暗褐色を基調とし、下部の掘り込みは、黄灰色の砂を基調とする。上部からは、土師質土器、越中瀬戸焼、鉄鋤、砥石、被熱石、が出土し、下部からはSK27と接合する土師質土器が出土した。

SK30（第6図） 調査区西部、SK29の南に位置する。直径約1.6mの円形を呈し、深さ0.26mを測る。覆土は、上部は暗褐色、下部は黄灰色で、断面形はやや開く鍋底形である。土師質土器片、伊万里焼片が出土した。

SK31（第6図） 調査区南東部に位置し、調査区東側へ続く。上部に現代配管施設の搅乱を受ける。長軸2.7m、短軸0.6m以上を測る。断面から2基の土坑の切り合いが確認でき、南側の土坑（長軸1.8m）が北側の遺構を切っている。南側の土坑は断面逆台形を呈し、深さ0.2mを測る。覆土は暗褐色を基調とする。北側の土坑は断面鍋底形を呈し、深さ0.2mを測り、南側がやや浅い。覆土は暗褐色を基調とし、北側下部に黒褐色土が見られる。珠洲焼、近世陶磁器片が出土している。

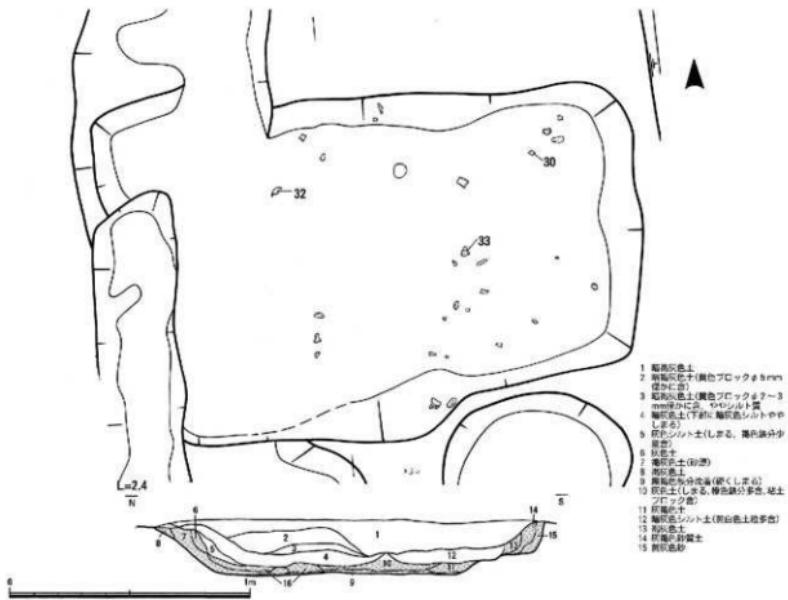
SK32（第6図） 調査区南部に位置する。直径約1mのやや楕円形を呈し、深さ約0.2mを測る。断面形は逆台形を呈し、東側に段を有する。覆土は暗灰褐色を基調とするが、下部で黄色砂が混じる。越中瀬戸焼、近世陶磁器などが出土している。

SK33（第6図） 調査区中央北寄りに位置する。長軸2.9m、短軸2.1mの楕円形を呈し、深さ0.65mを測る。覆土は暗灰褐色を基調とし、底部に凹凸を有する。上層部に大小40個程の集石を確認し、被熱石も含まれる。珠洲焼、土師質土器が出土した。

SK34（第6図） 調査区中央に位置する。直径約3.4mの不整円形を呈し、深さ約0.65mを測る。覆土は黄灰色を基調とし、断面形は底面の広いU字形を呈する。越中瀬戸焼、近世陶磁器などが出土した。

SK36（第6図） 調査区中央に位置し、SK34、39と切り合い関係を持つ。長軸2.6m、短軸1.5mの不整楕円形を呈し、深さ約0.5mを測る。銅錢「皇宋通寶」、近世陶磁器片が出土した。

SK37（第6図） 調査区中央やや東寄りに位置する。約2.5m×2.1mの長方形を呈し、深さ約1.2mを測る。覆土は黄灰色を基調とし、断面形はU字形を呈する。東側で柱穴状の遺構のSK40に一部切られる。土師質土器が出土した。



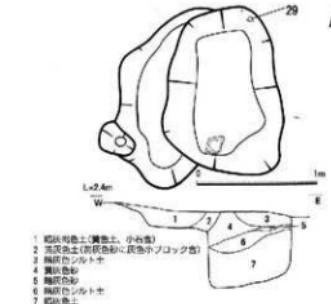
第10図 S K29遺構図及び土層断面図 ($S = 1/20$)

S K38 (第6図) 調査区中央に位置

する。直徑約1.2mの円形を呈し、深さ0.35mを測る。覆土は暗黃灰色を基調とし、断面形は鍋底形を呈する。越中瀬戸焼が出土した。

S K39 (第6図) 調査区中央に位置し、南側を土坑に切られる。長軸2.2m、短軸約1.1mの不整橢円形を呈し、深さ0.55mを測る。覆土は黄灰色を基調とする。越中瀬戸焼、磁器片が出土した。

S X08 (第6、16図) 調査区中央南寄りに位置し、西側を切られる。長軸1.3m、短軸0.9mの不整円形を呈し、深さ0.6mを測る。覆土は暗灰色を基調とする。底部から青磁、割石が出土した。

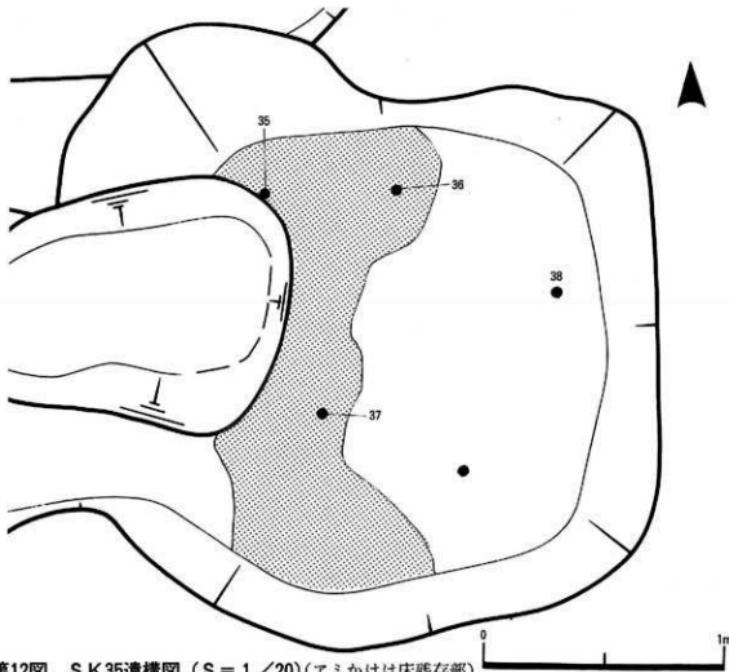


第11図 S X08 遺構図 ($S = 1/40$)

2) 方形堅穴状遺構

調査区東部に底面に粘土～シルト質のややしまった貼床を有し、方形を呈する堅穴状遺構を4基検出した。

S K29 (第6、10図) 調査区東部に位置する。長軸4.5m、短軸2.9mの長方形を呈



第12図 SK 35造構図 ($S = 1/20$) (アミかけは床残存部)

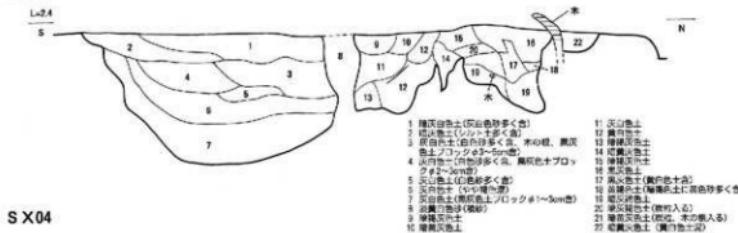
し、床面までの深さ約0.36mを測り、約7~10cmの灰色を基調とするシルト質の床が底面に確認できる。造構西部を南北にS D07が縦断し、更にS D09も重複して縦断する。床上部の覆土は暗褐色土を基調とする。珠洲焼、土師質土器、越中瀬戸焼、伊万里焼、骨片、被熱石などが出土している。

SK 35 (第6、12図) 調査区東部に位置し、西側に土坑と切り合い関係を有する。一辺2.4mの方形で、北東部一部が北側へ張り出す形状を呈し、深さ0.36mを測る。底面西半部に床と考えられるシルト質のしまった層を確認した。覆土は、暗灰色を基調とし、底部に床に伴うシルト質土が堆積する。断面形は鍋底形を呈する。近世陶磁器に、混じって弥生土器片が散見された。

S X04 (第6、13図) 調査区東端に位置し、一部調査区東側へ続く。南北4.6m、東西3m以上の方形を呈し、深さ0.85mを測る。断面形は鍋底形を呈する。底面に平面的には確認できなかったが、断面観察により南壁面を共有する南北2.65m、深さ約0.5mの造構が重複していた。南北4.6mの造構の覆土は暗灰色を基調とし、底面に厚さ0.1~0.2mの暗灰色シルト質の貼り床を有する。貼り床底面と地山黄色砂の境目に砂混じりの赤褐色鉄分が硬化し沈着していた。南側壁面の粘土貼りの厚さは0.25mを測る。南北2.65mの造構の覆土は、暗黄灰色を基調とし、底面に褐色鉄分が沈着している。北側の壁面は、暗灰色土を呈し黒褐色鉄分を含む。厚さ0.1mを測る。越中瀬戸焼、近世陶磁器、弥生土器、須恵器などが出土した。

S X05 (第6、13図) 調査区東部に位置する。ほぼ東西方向の長辺約4.3m、短辺3.6mの長方形を呈し、深さ0.53mを測る。覆土は、暗灰褐色土を基調とし、底面及び

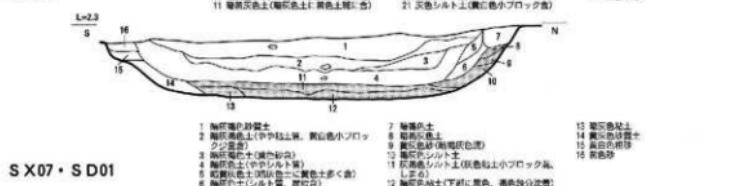
S X03



S X04



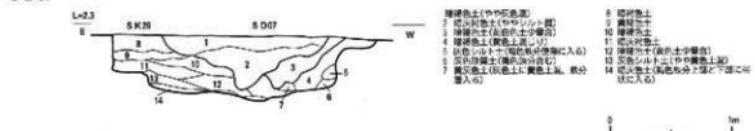
S X05



S X07・S D01



S D07



第13図 遺構土層断面図 (S = 1 / 40)

残存する壁面の立ちあがり部位に厚さ約0.13mの灰色粘土を基調とするしまった貼り床が認められた。珠洲焼、土師質土器、越中瀬戸焼、伊万里焼など近世陶磁器、土鍤、弥生土器が出土した。

3) 溝

S D01 (第6、13図) 調査区北西部に位置し、東西方向に幅広く延びる浅い溝で、幅3~3.4m、深さ0.25mを測る。S X07の上面を切る。覆土は、暗灰色を基調とし、下部に薄く褐色鉄分の沈着が認められた。遺構上面から土師質土器、越中瀬戸焼などが出土した。

S D04 (第6、8図) 調査区西部に位置し、南北方向に延びS K09を切り、S D05に切られる。幅約1m、深さ約0.3mを測る。覆土は、暗褐色土を基調とする。近世陶磁器が出土した。

S D05 (第6図) 調査区南西部に位置し、東西方向に延びSD04を切る。幅2~2.2m、深さ0.15mを測る。覆土は、暗灰色を基調とする。近世陶磁器が出土した。

S D07 (第6、13図) 調査区東部に位置し、南北方向に延びる。幅1.5m、深さ0.45mを測る。断面形は半円形~やや開くV字形を呈し、覆土は暗灰褐色土を基調とする。土師質土器、越中瀬戸焼、近世陶磁器、土鍤などが出土した。

S D09 (第6図) 調査区東部に位置し、SD07と重複する。長さ3.5m、幅0.6m、深さ約0.3mを測る。断面形はU字形を呈するが、床面の凹凸が顕著である。覆土は、暗褐色を基調とする。近世~近代陶磁器、鉄製品などが出土した。

4) 井戸

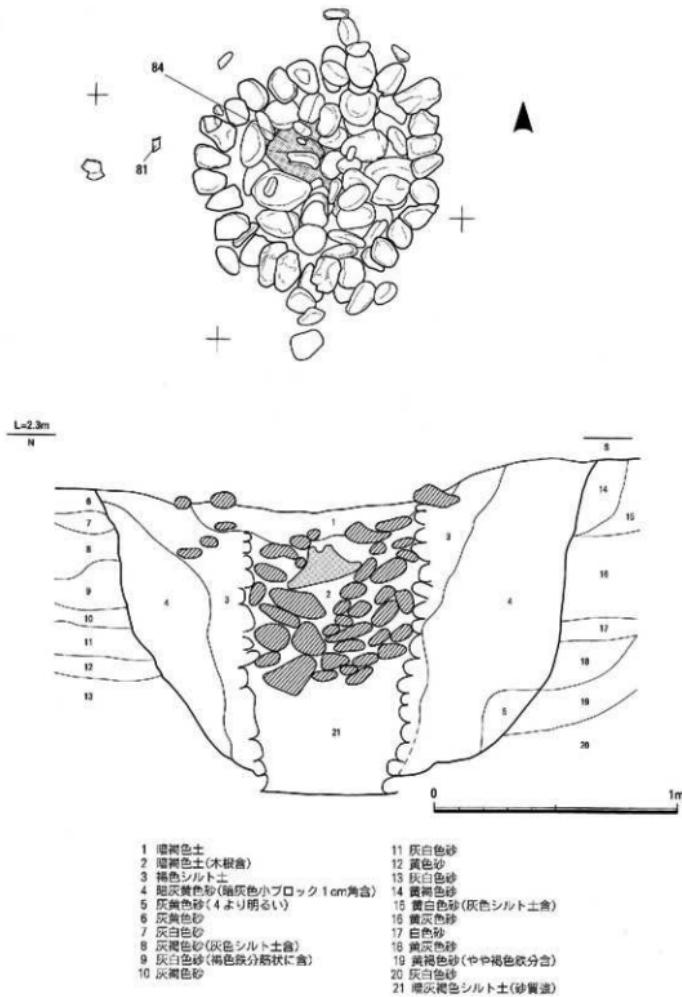
S E01 (第6、15図) 調査区北東部に位置する。掘り方直径約2m、深さ約1.4mを測る。井戸側に石組みを用いる井戸で、石組みの内径は0.7mを測る。石組み内部の覆土は、井戸底から約45cmは暗灰褐色シルト土(やや砂質強い)が堆積し、その上部約40cmにかけては10~20cm大の石が密に入っていた。その上部には、石に混じって、五輪塔の火輪が1点出土した。石組みに用いられた石は10~20cm大の川原石を用いられ、一部に石臼を1/2~1/4にしたもののが7点転用され組み込まれていた。掘り方埋土は灰黄色砂が主体であるが、石組み背後は褐色シルト土で固定されていた。石組み掘り方から越中瀬戸焼が出土した。

5) 柱穴

S K40 (第6図) 調査区中央東寄りに位置する。長軸1.55m、短軸0.72mの楕円形を呈し、中央に柱痕と思われる直径0.25mの穴が掘り込まれ、断面にも観察される。覆土は暗灰色を基調とし、黄色ブロックを含む。

6) 不明遺構

S X03 (第6、11図) 調査区北東部に位置する。2.2m×3.5mの不整円形を呈し、覆土は暗灰色を基調とする。木の根が多く、中央部に地震による噴砂現象の痕跡が観察された。土師質皿、越中瀬戸焼、伊万里焼などが出土した。



第14図 石組み井戸 (S E01) 平面図及び断ち割り断面図 (S = 1/20)

S X07 (第5図) 調査区北西部、S D01の下部に位置する。約6m×4.5mの不整形形を呈し、中央やや西よりの下部に1.5×1.7mの楕円形を呈し深さ1.3mを測る掘り込みが検出され、最深部付近から五輪塔地輪が出土した。若干の湧水が認められ、大規模な掘り方を持つ井戸跡の可能性が考えられる。

4. 遺物

遺構出土の遺物（カッコ付き数字は写真図版のみ）

1) 土坑

S K01 1は土師質皿である。口縁端部内面に段を有し、口縁内外面に黒色の油煙の付着が認められる。口径は9.2cmに復元できる。2は越中瀬戸焼の鉄釉碗の口縁部である。3は土鍤で直径4.3cm、硬く締まっており、外面に指頭圧痕が残る。

S K03 4は須恵器の杯B身の底部である。底部径約9.6cmを測る。割れた後二次的に熱を受けている様子が底部内面や断面に見える。他に越中瀬戸焼、八尾焼の擂鉢がある。

S K05 5は土師質皿の口縁部である。口縁端部内面に段を有する。

S K06 6は土師質皿である。口径8.6cmを測る。

S K12 永楽通宝が1点、長さ約35cm径約8mm中央でくの字に折れる鉄製品、石臼の下臼約5分の1程の破片が出土している。

S K19 7は土師質の皿である。口径9.1cm、器高2.2cmを測る。内面に黒色煤の付着があり、灯明皿として使用していたものと思われる。

S K21 8、9は土師質皿である。8は復原口縁約9.8cmを測る。内外面に回転を利用したナデ調整が施される。9は復原口径約9.8cmを測る。口縁内面にやや面を取り、細い刻みを入れている。10~12は越中瀬戸焼である。10は灰釉の丸皿である。口径11cmを測る。11は鉄さび釉の向付で、口径11cmを測る。12は鉄さび釉の擂鉢の底部で単目の単位は8本である。底部に糸切り痕が残る。他に重さ280gを測る楕型滓が1点ある。

S K22 13は治平元寶である。北宋銭で初鋤は1064年である。14は元豐通寶である。北宋銭で初鋤は1078年である。他に1点不明古銭がある。

S K25 15は土師質皿である。内外面の一部に被熱痕が見える。

S K28 16は越中瀬戸焼鉄釉の丸皿である。内面底部に重ね焼き痕が見られる。他に砥石(17)、重さ約160gを測る鉄滓(18)などがある。

S K30 19は磁器の底部である。底径約6cmを測る。他に土師質皿がある。

S K31 20は珠洲焼の壺の体部片である。外面に綾杉文叩きが見られる。他に直径約2.2cmの穿孔を有する石玉(21)や肥前焼片がある。

S K33 22は土師質小皿である。非ロクロ成形で口径8.0cm高さ1.9cmを測る。

S K34 23、(24)は肥前焼の皿である。17世紀末~18世紀初め頃に位置付けられる。

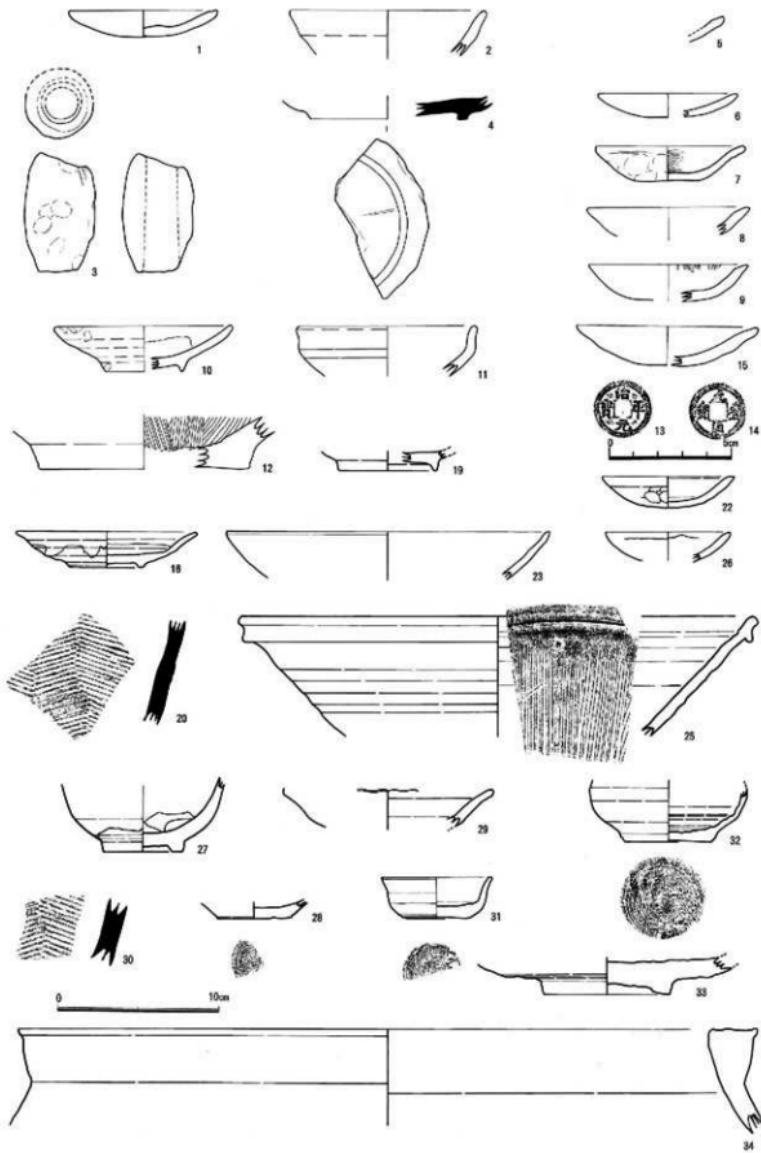
25は鉄さび釉の擂鉢である。単目の単位は7本で密に刻まれる。

S K37 26は土師質小皿である。復原口径約7.4cmを測る。口縁部内外面に黒色煤が付着した灯明皿である。

S K38 27は越中瀬戸焼の鉄釉の丸碗である。

S K39 28は越中瀬戸焼の丸皿底部である。内面に鉄さび釉、底部糸切り痕が見られる。

S X08 29は青磁のひだ皿である。15世紀代のものである。



第15図 遺構出土遺物実測図 (13、14は S = 1 / 2 他は S = 1 / 3)

2) 方形堅穴状遺構

S K29 30は珠洲焼の甕の体部片である。外面に綾杉文叩きが見られる。31、32は越中瀬戸焼で31は向付で、鉄さび釉が底部内外面以外に施される。口径6.6cm、器高2.5cmの小判品で、底部は回転糸切りである。32は丸碗で内面に鉄さび釉が見られる。底部は回転糸切りで、径5.2cmを測る。33は唐津焼の皿の底部である。暗緑色に施釉され内面縮縫皺が見られ重ね焼痕もある。外底面付近は露胎である。内面に重ね焼痕が見られる。17世紀後半のものである。34は越前焼大甕の口縁部である。鉄釉が内外面に塗られている。

S K35 35は越中瀬戸焼の鉄釉の丸皿である。36は伊万里焼染付けである。37、38は弥生土器で混入品と思われる。37は壺の口縁部である。38は壺の底部である。

S X04 39は弥生土器高杯の脚部である。40は須恵器長頸壺の頸部である。41、42は肥前陶器丸皿である。41は灰白色の施釉がなされ、一部内面に青緑色の釉が点状に施される。内底面は蛇目に露胎し、外面下半部も露胎する。42は内面と外面端部に及ぶ緑釉が施され、外面は灰釉で底部は露胎である。43、44は同一個体の可能性が高い唐津焼の大皿である。内底面に砂目が見られる。45は青磁皿の底部で内面と高台底部が露胎である。46は磁器の皿である。47～55は越中瀬戸焼である。47は灰釉の丸皿で内面に釉止めの段を有し、底部削り出し高台である。48は、丸皿で鉄釉が施されている。49は鉄釉の匣鉢である。50は鉄釉の丸碗の体部である。51は鉄釉の瓶である。52～55は鉄さび釉の壺である。匣鉢として使われたものを利用したようである。53の外底部に回転糸切りが見える。56は鉄釉の施された高台付き擂鉢である。内外面に黒色付着物が多く残る。57は土錘である。径1.7cmの穿孔を有する。他に約85gを計る椀型滓や須恵器横瓶閉塞円板などがある。

S X05 58は鉄釉の擂鉢で外底部回転糸切りである。59は越中瀬戸焼の鉄釉丸皿である。60、(61)、(62)、(63)は肥前陶磁である。(64)は土錘である。他に珠洲焼片などがある。

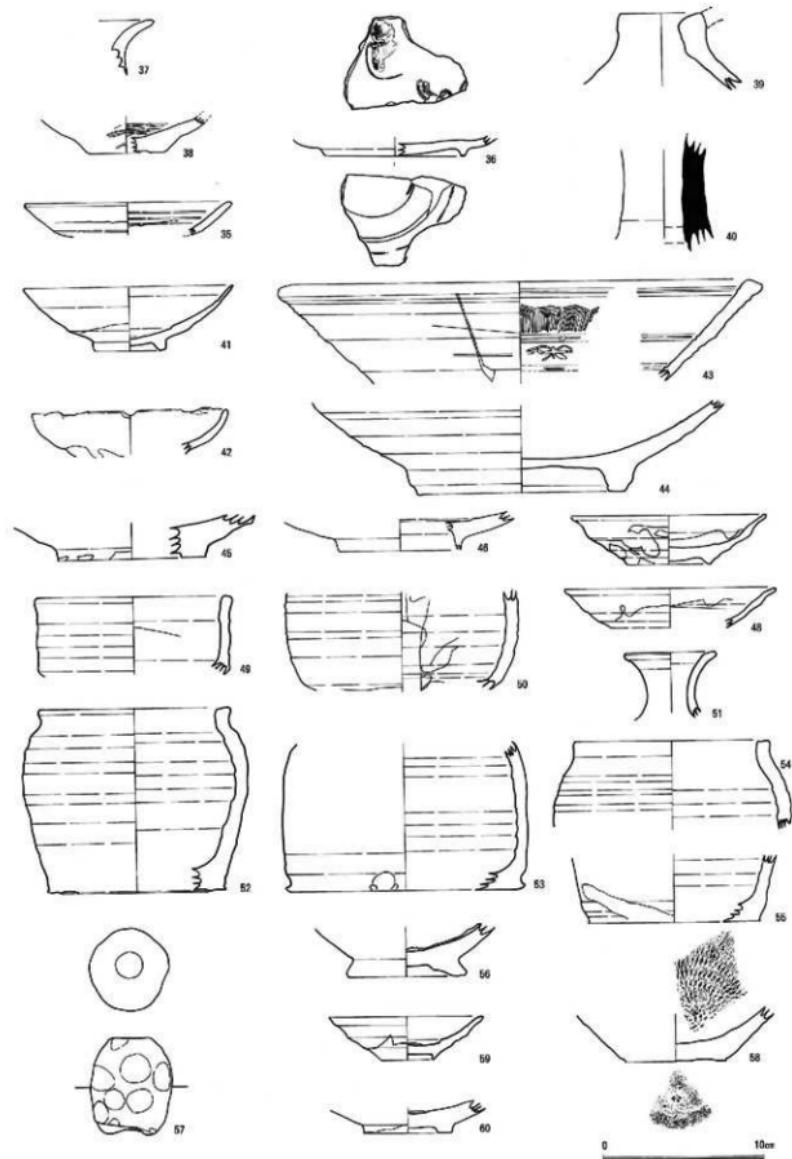
3) 濁

S D01 65は管玉状の上製品である。穴が貫通している。土錘の可能性がある。66は土師質皿である。内面及び外面口縁部に黒褐色の付着物が見え灯明皿である。

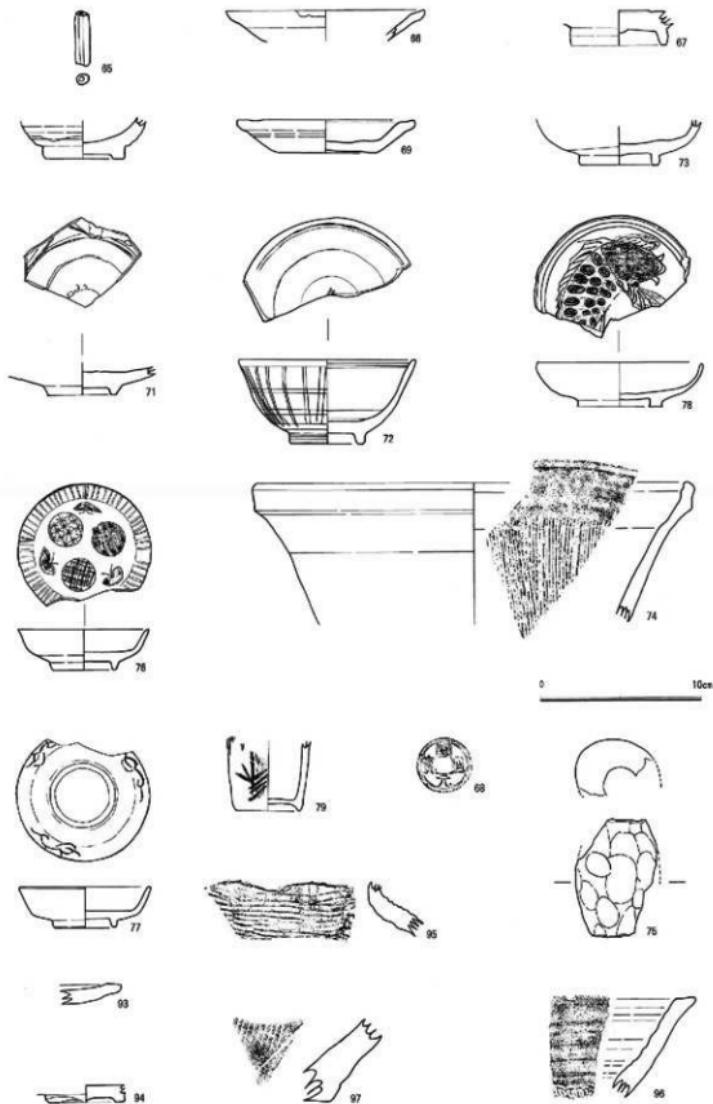
S D05 67は肥前陶器の皿の底部である。内面中心部蛇目釉剥内側の高まりに褐色、緑灰色の釉が見える。68は古錢で「開元通寶」である。初鑄は621年、845年（唐）、960年（南唐）とあるが、何れのものかは確定できなかった。

S D07 69は土師質皿である。内面ほぼ全面に煤が付着し、灯明皿として使用していたものである。70は越中瀬戸焼の丸碗である。内外面鉄釉で外面下部は無釉である。71、72は肥前磁器で、71は内面底部蛇目釉剥ぎの露胎を有する皿である。72は二重の網目の線が施される碗である。73は在地産の陶磁器で内面灰釉、外面黒色釉がかかる。74は唐津焼擂鉢である。75は七錘である。他に土師質の土人形と思われる破片がある。

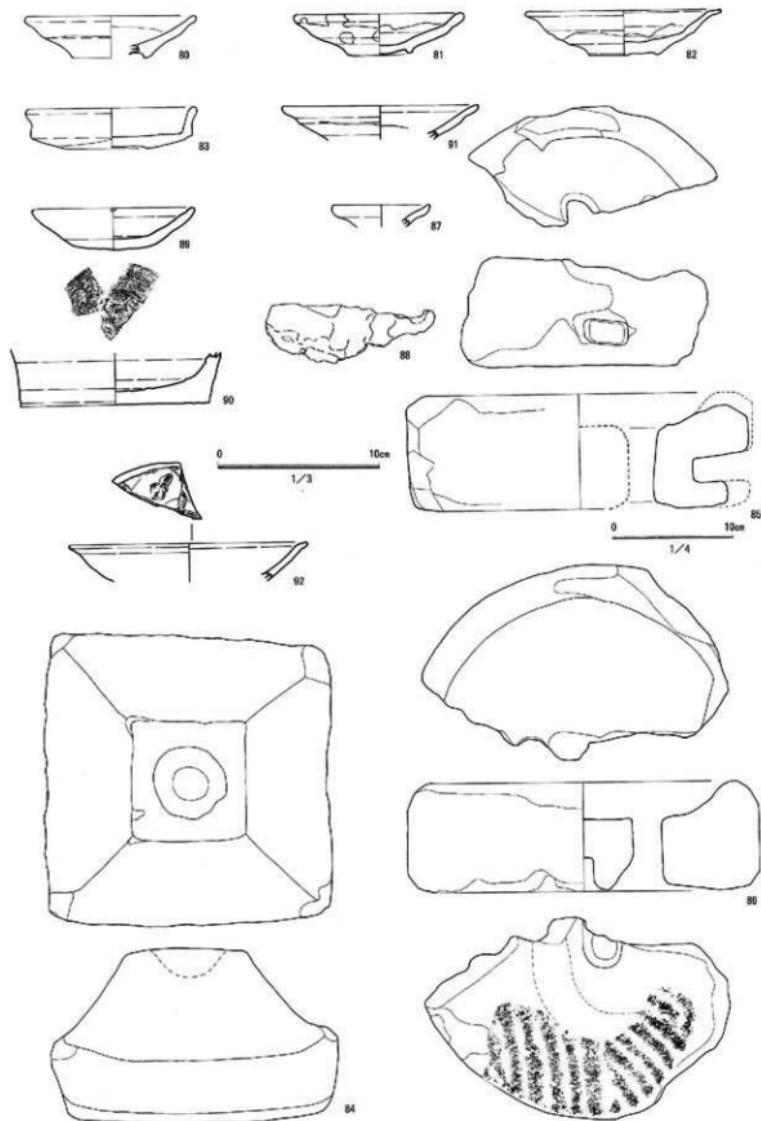
S D09 76・77・78は伊万里染付皿である。19世紀代のものである。79は肥前陶磁の跳子である。



第16図 遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 3)



第17図 造構出土遺物実測図 (68はS = 1 / 2 他はS = 1 / 3)



第18図 遺構出土遺物実測図 (83~85はS = 1/4 他はS = 1/3)

4) 井戸

S E01 80～83は越中瀬戸焼である。80は内外面上半部に灰白色釉の内禿丸皿である。石組み中から出土している。81は内外面口縁部付近に灰釉のかかる丸皿である。釉止めの段が付き高台は、削り山して作られる。井戸内と井戸掘り方上面部から出土したものが接合した。82は鉄釉丸皿である。削り出し高台が付き、内面に釉止めの段が付く。83は鉄さび釉向付である。削り込み高台で、釉止めの段が付き底部は露胎である。84は五輪塔の火輪である。井戸内上部埋土から疊と共に出土した。85・86は石臼の上臼である。井戸の石組みに転用されていた。他に掘り方上面から磁石が1点出土している。

5) 柱穴

S K40 87は越中瀬戸焼の鉄釉瓶の口縁である。88は刀子である。

6) 不明遺構

S X03 89は土師質皿である。ロクロ成形で底部回転糸切りを行う。90は越中瀬戸焼の匣鉢の底部である。底部外面に回転糸切りが見られる。91は越中瀬戸焼の鉄さび釉丸皿である。92は伊万里焼の皿である。

S X07 93は土師質皿である。94は白磁皿底部である。高台底部を削り込んで短い四脚にしている。95・96は珠洲焼である。95は甕の頸部である。96は片口鉢で吉岡編年IV期に属する。97は越前焼鉢である。S X07は、15～16世紀代のものである。

遺構以外の出土遺物

遺構以外からは、遺物包含層などからコンテナ箱4箱分の遺物が出土した。遺構から出土した種類の遺物以外にキセル（写真図版8）、墨書き器（第21図）がある。

調査区中央部の遺構に含まれない地山直上から石臼の下臼（写真図版8の右下）が1点出土した。側面に敲打による面取りがなされている。

IVまとめ

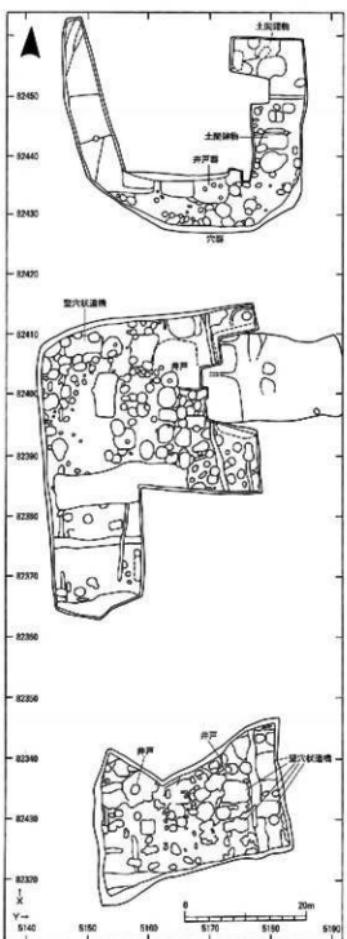
千原崎遺跡は、平成6～10年度の第1～3次調査で17世紀前半と17世紀後半～18世紀前半の2時期に集落が形成されていたことが明らかになっていた。今回の第4次調査区は、それら集落の南側に位置し、遺構の状況からほぼ同時期の集落の一角にあたるものである。

遺構の年代は、出土した越中瀬戸焼や、土師質土器などから、17世紀後半～18世紀前半を主体とするものである。

今回の調査区で特徴的なものとして、方形竪穴状遺構が挙げられる。厚さ10cm以上の粘土貼りの床を持つ建物跡であるが、床からは柱穴などの痕跡は確認できなかった。このような遺構は「竪穴状土坑」と呼ばれ、これまでには性格不明遺構とされてきた。近年の調査例の増加で、その性格として①土間的な作業場②工房もしくは炊事場③鍛冶関連作業場④厩といった利用が考えられている（河西1994）。これらは、掘立柱建物に付帯する例が多く、富山市水橋清水堂南遺跡の近世期の遺構においても屋敷地割毎に掘立柱建物や井戸とセットで検出されている（富山市教委2000）。

一方、千原崎遺跡で検出された方形堅穴状遺構については、掘立柱建物を伴わず数基がまとまって検出されている。中には覆土中に炭や焼土を含むものも見られ、遺構内や周辺から椀型鋤が出土していることから、集落内で鍛冶を行っていた遺構の可能性が推測される。

第3次までの調査で集落が港町宿場的な性格を有していたことが明らかになっていた。



港町では肥前系の陶磁器が割合を多く占めるが、当遺跡では地元産の越中瀬戸焼の割合も多いことがこれまでの調査で明らかになっており、物資集積関連施設等の存在も想定され(古川1998)、越中瀬戸焼の流通における中継地の可能性も考えられた。集落内に鍛冶関連の作業場を併設していると、その消費地としての役割が加わり当集落内での陶磁器の使用も想定されよう。また、土師質土器についても平成10年度までの調査に比較し割合が増え、その多くが灯明皿として使用されており、何らかの作業に伴った利用が推測される。

このように、千原崎遺跡の集落は、港町宿場的な性格に加え、鍛冶関連の作業場を併設する集落の様相が明らかになってきた。時期的には今回の調査区から出土する陶磁器は、17世紀後半から18世紀初頭のものが多くを含めており、当該時期に鍛冶関連の性格が加味されたとも考えられる。

また、今回の報告文で詳細を述べることが出来なかったが、S X03の遺構を切るように地震の噴砂現象が観察された。調査区壁面にも関連する地山砂の動きが観察できた。このことについても機会があれば稿を改めて報告したい。

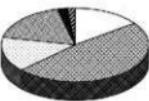
さらに今回の調査においても、弥生時代末から古墳時代初期にかけての遺構は検出されなかった。当該時期の遺物は出土しているものの摩滅したものが多く、井戸の断ち割りからも判断できるが、下層にこの時期の遺構は所在しないことが明らかである。当遺跡の別地点に遺構が所在するのではないかと考えられる。

第19図 千原崎遺跡遺構概略図 (S = 1 / 800)

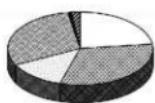
平成6~10年度調査



総計

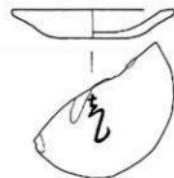


今回(平成12年度)調査



第20図 千原崎遺跡出土陶磁器等の構成（出土数は破片数）

第21図 包含層出土墨書き土師質土器(S=1/3)



参考文献

- 大村正行 1921 「弥生式土器遺跡」富山縣史蹟名勝天然記念物調査報告 2
 湊 晨 1945 「千原崎遺跡」『富山県史 考古編』富山県
 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』
 大橋康二 1993 『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
 河西健二 1994 「雜記 建物遺構－古墳から近世まで－」『埋蔵文化財年報(5)』
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
 福井県陶芸館 1995 『越前の名陶』
 市村高男 1996 「中世後期の津・湊と地域社会」『中世都市研究3 津 泊 宿』中世都市研究会
 富山市教育委員会 1996 『富山市千原崎遺跡発掘調査報告書』
 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告』
 宮田進一 1998 「越中瀬戸の窯資料(1)」「大境 第12号」富山考古学会
 宮田進一 1998 「越中瀬戸の変遷と分布」『中・近世の北陸 考古学が語る社会史』
 北陸中土器研究会 桂書房
 富山市教育委員会 1998 a 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
 富山市教育委員会 1998 b 『富山市内遺跡発掘調査概要II 四方北窯遺跡』
 古川知明・鹿島昌也 1998 「富山市内の近世遺跡」『北陸近世遺跡研究会会報No.7』
 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会1998「越中瀬戸一発祥記念四百年記念誌」
 富山市教育委員会 1999 「千原崎遺跡発掘調査概要」
 富山市教育委員会 2000 『富山市水橋清水堂南遺跡』

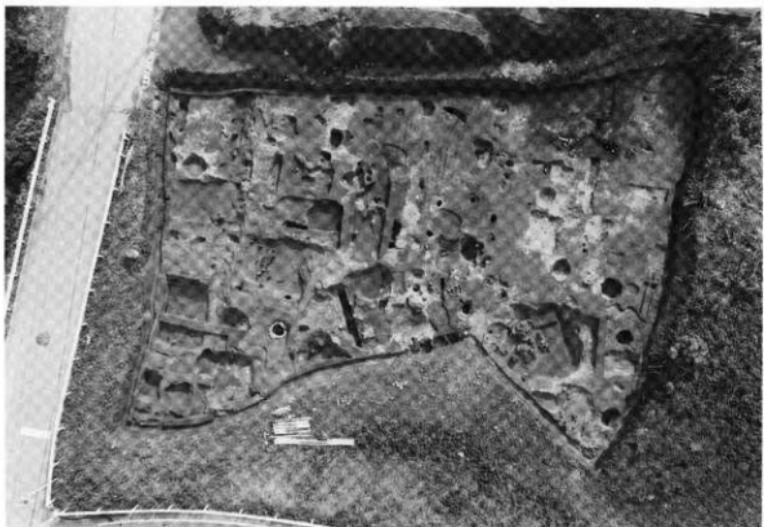


千原崎周辺の航空写真（1992年）



調査区遠景（北から）

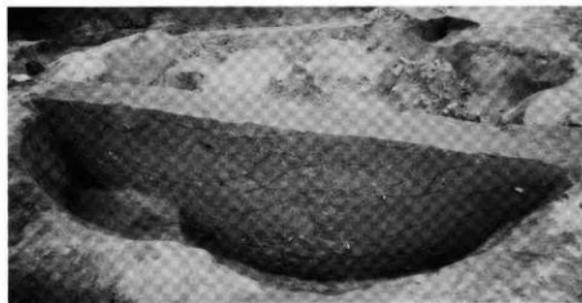
▲



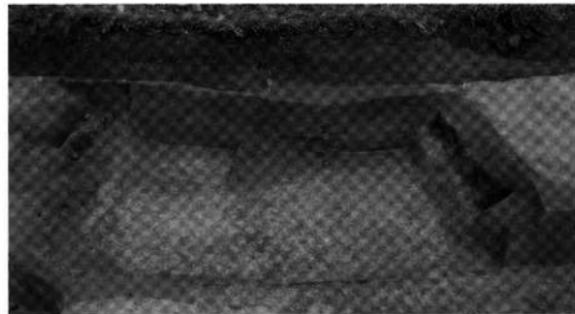
発掘調査区全景（真上から、上が南）



調査区遠景（南から）



S X07土層（西から）



S K29土層（西から）



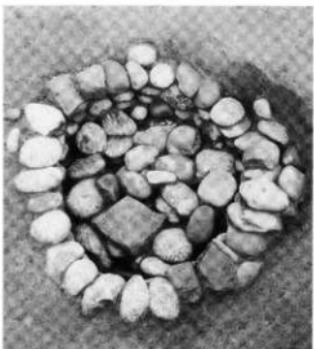
作業風景（SK12付近）



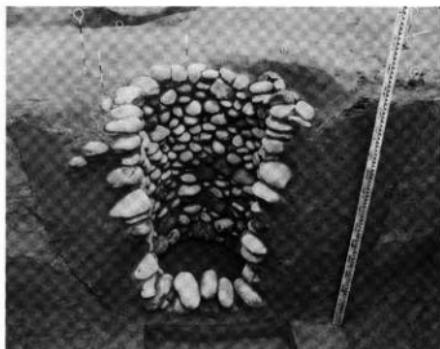
S D07



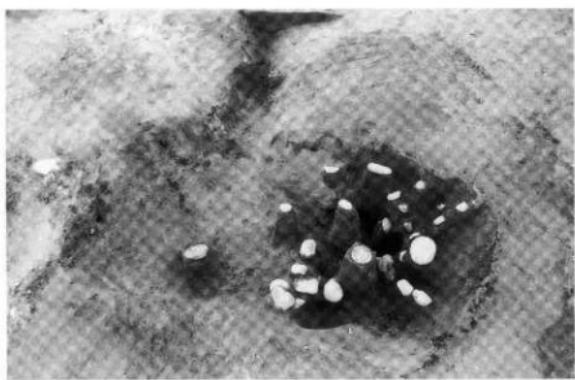
S X05
(東から)



S E01五輪塔出土状況



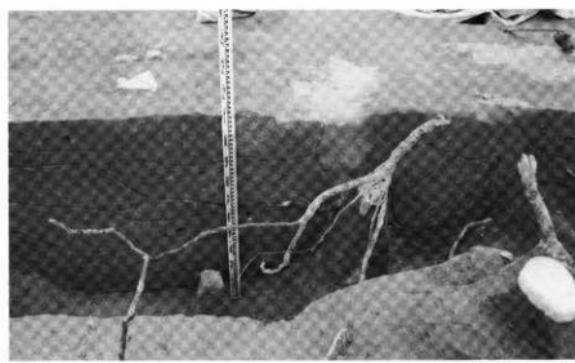
S E01断ち割り（西から）



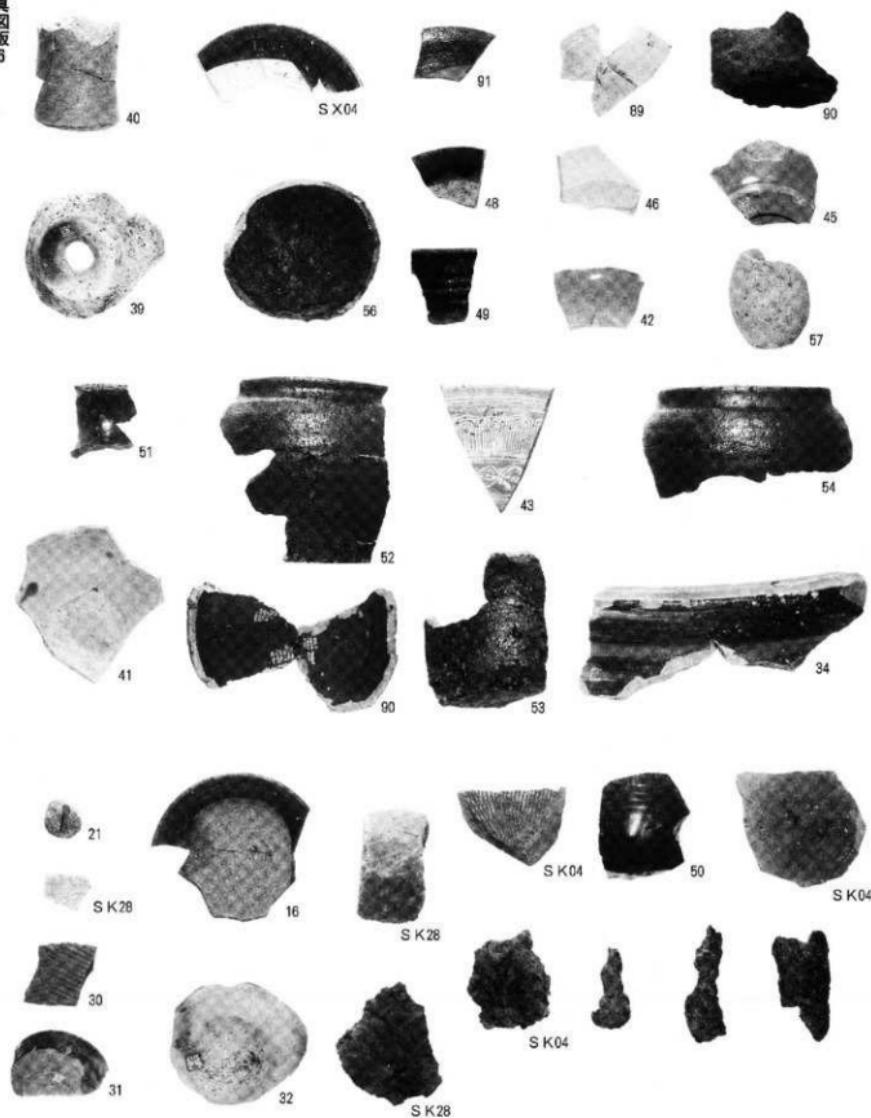
S K19とS D04（北から）



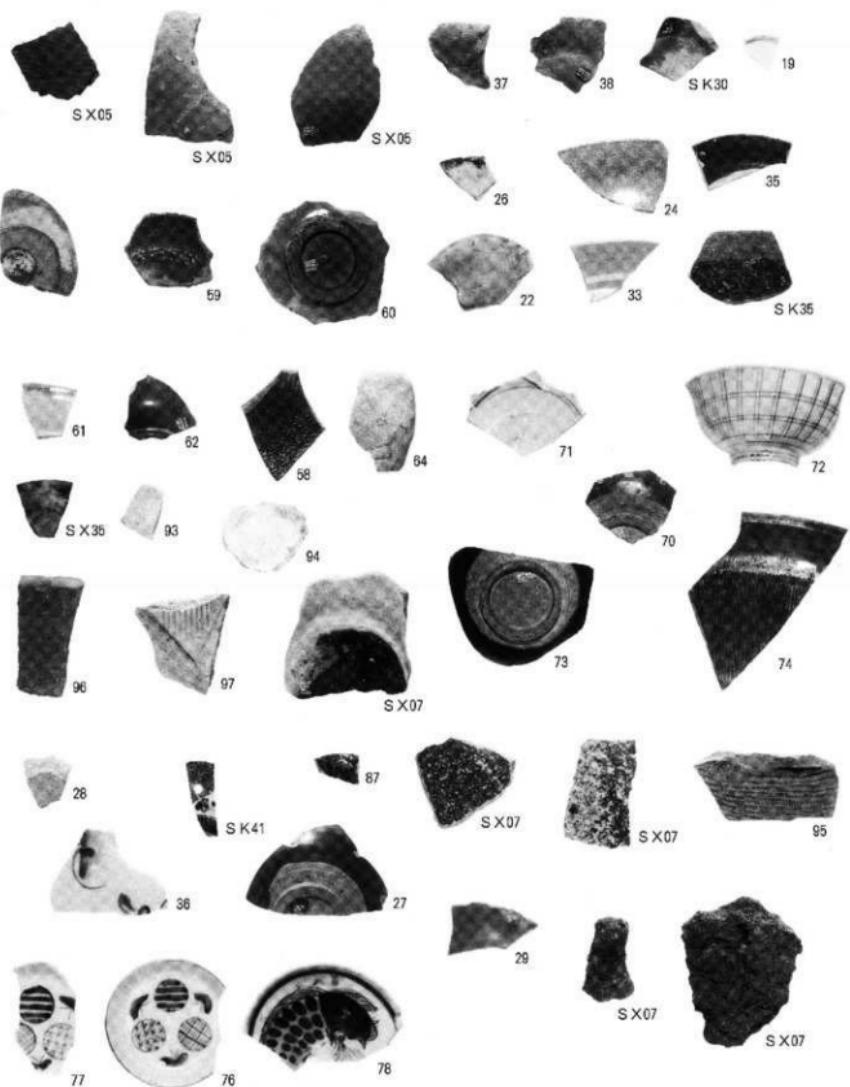
S K25（かまと付近）北から



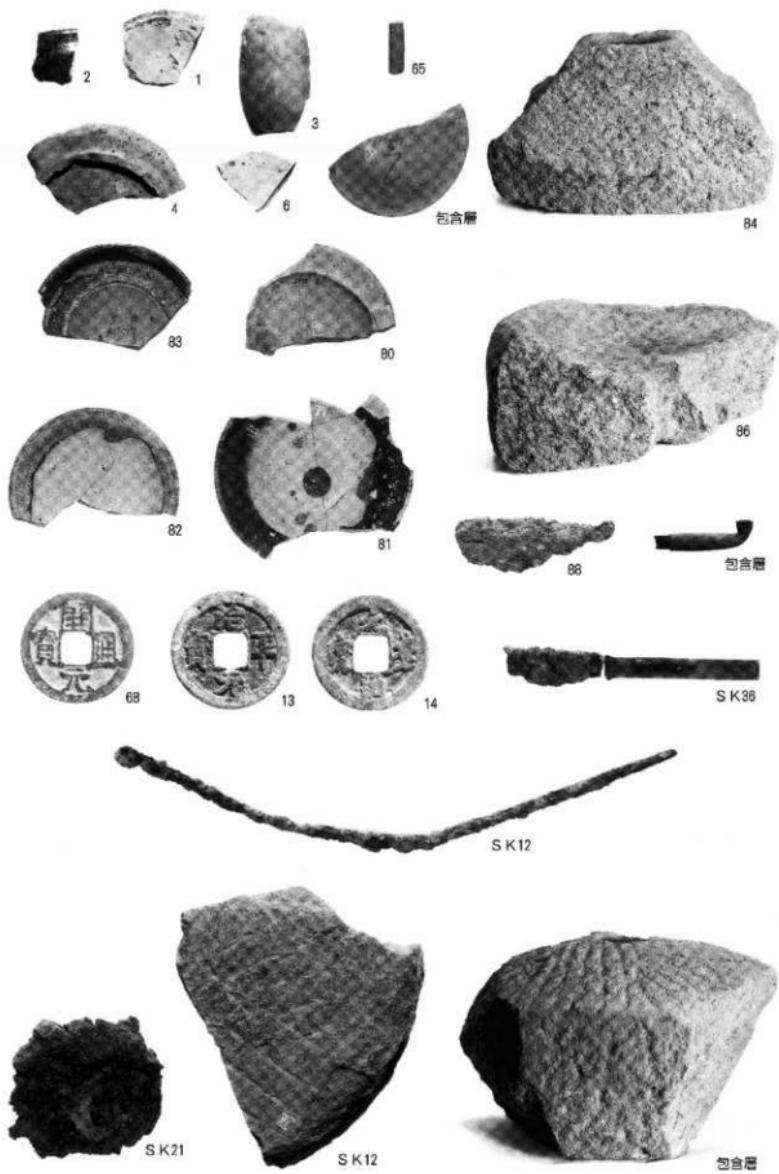
S X03噴砂のようす（東から）



遺構出土遺物（番号は本文中の遺物番号に対応）



遺構出土遺物（番号は本文中の遺物番号に対応）



出土遺物（番号は本文中の遺物番号に対応）

報告書抄録

書名	富山市千原崎遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	一般国道415号道路改築(萩浦橋)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	(3)							
編著者名	鹿島昌也 古川知明							
編集機関	富山市教育委員会							
所在地	〒930-0803 富山県富山市下新本町5番12号 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦 2001年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' ''	東経 ° ' ''	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千原崎遺跡	富山市千原崎 1丁目	16201	017	36度 44分 30秒	137度 13分 30秒	19990911 ~ 19991209	720	国道415 号道路改 築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千原崎 遺跡	集落	中世、 近世	溝、穴、 井戸、方 形竪穴状 遺構	弥生土器、須恵器、 土鏡、珠洲焼、土 師質上器、青磁、 銅鏡、五輪塔、砥 石、石臼、刀子、 鐵滓、越中瀬戸焼、 唐津焼、伊万里焼、 越前焼、八尾焼、 キセル		中世末～近世前期 にかけて港町的な 集落。方形竪穴状 遺構、鐵滓等を検出。 集落内で鍛冶を行っていた作業場の可能性が推定される。		

富山市埋蔵文化財調査報告107

富山市千原崎遺跡発掘調査報告書

—一般国道415号道路改築（萩浦橋）事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告—

2001（平成13）年3月28日

発行 富山市教育委員会
編集 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0803
富山市下新本町5番12号
TEL 076-442-4246
FAX 076-442-5810
E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp
印刷 とうざわ印刷工芸株式会社

